

桐 島 洋 子 (きりしま ようこ)

昭和12年7月東京生れ。幼時は上海のフランス租界で育ち、終戦後、少女時代の大半は神奈川県葉山で過ごし、カトリックの清泉女学院に学ぶ。

31年都立駒場高校卒業とともに、文藝春秋に入社。「文藝春秋」「漫画讀本」「オール讀物」各編集部勤務。

40年退社後、ソ連・ヨーロッパ・東南アジアを歴訪。

42年ヴェトナム戦線に従軍。

43年アメリカ全土をバス旅行。

44年再び渡米して現在カリフォルニア州に在住。未婚。

混血の三児がある。

現住所： c/o Yacht Antigua, 255 Portofino Way,
Redondo Beach, California, 90277 U. S. A.

渚と漣と舵

ふうてん・ママの手紙

著者承認検印省略

©1970年

昭和45年1月15日 初版印刷

昭和45年1月20日 初版発行

著 者 桐 島 洋 子

発行者 宮 本 孚

印刷 (株)亨有堂印刷

製本 (株)川島製本所

発行所 株式会社 オリオン出版社

東京都中央区銀座8の19・和泉ビル

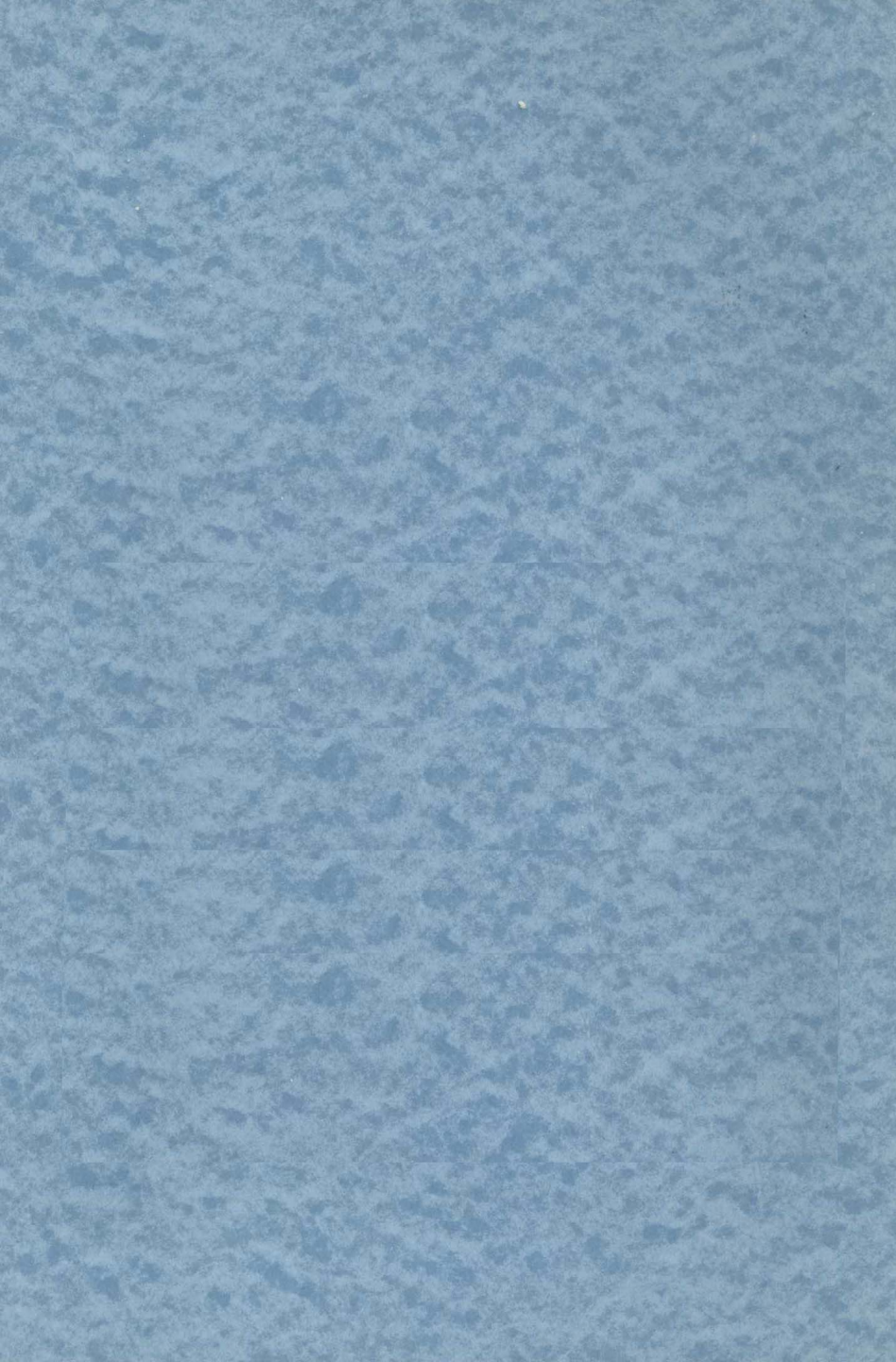
振替東京68782 電話(543)9181(代)

定価450円

桐島洋子

渚と漑と舵

Zoe
Noelle
&
Rowland★



「渚と漕と舵」 目次

—Zoe, Noelle, and Rowland—

渚と漕と舵に 7

一九六五年十月～十二月

ソ連・ヨーロッパ・アジア出産旅行記

53

一九六七年三月～四月

グッド・ウィーリー航海記

121

一九六九年五月～六月

ヴェトナム戦線従軍記

183

あとがき 241

装幀

川添容子

渚と漉と舵に

—ふうてん・ママの手紙

渚と澤と舵に

ZOE、あなたのことをゾエと呼んでいるけれど、本当はゾウと発音するようです。大英辞典巻末の命名案内を見ると、女子の部の最後から一番目に載っていますよ。英語で言えばライフ、すなわち生命・人生・生活を意味する、ギリシャ語の名前です。

テレビなどという悪魔の箱が現われる前の子供だった私は、ギリシャ神話にとっぷり浸って、ひどく夢想的な少女時代を過したものだから、今でもギリシャというだけで、夏虫の羽音のような懐しさにつきまとわれます。現在のギリシャはまるで貧乏な後進国だし、横浜の安酒場あたりに群がってるギリシャの船乗り達ときたら、いずれも美神^{アポロ}とは似ても似つかぬ情ない御面相の小男なのね。

でも私のギリシャは、豊饒な光と詩に溢れ、美しい裸形の神々が、白い波頭や梢のざわめきや夕陽に燃え上る大理石の円柱のかけから、一斉に手をひろげて駆けよって来る世界です。

そのイメージに於て、ゾエはまさしくギリシャ的な環境で、しかもあのアフロディテのように、紺青の海が砕けるところから生れて来たのです。

あの日、一泳ぎすませて浜へ上りかけていた私の背中に、突然思いがけない高波が襲いかかり、およそ不安定に膨れ上っていた臨月の軀などひとたまりもなくひっくり返り、もろに巻き込まれた挙

句、波打際にしたたかとはきつけられました。まだ子宮の中にちぢこまっていたゾエは、ずいぶんとびっくりしたことでしょね。

泡にまみれ砂を噛みながら、ようやく起き上った瞬間、陣痛というあの不思議な関きまの声を、生れてはじめて、私は軀の奥にしかと聞いたのでした。

渚ーゾエが持っているもう一つの名前です。

その頃、私は、神奈川県二宮の海に面した松林の中に、小さな家を借りて、あなたの父親だったアメリカ人と一緒に暮していました。ダグは私より二倍も年上だったけれど、当時は充分に若々しかったです。少くとも私と同じくらい元気で、海と冒険がなによりも大好きでした。

私が子供を生むための隠れ家を探すのにも、海が見えることだけは絶対条件で、二人は葉山、逗子、茅ヶ崎から小田原に至るまで、数えきれないほどの家を見てまわったものです。でも二宮の家を一目見たとたん、ああこれだと叫んでしまいましたよ。それこそ私達キチガイの城以外のなにものでもなかったのです。

海が見えるなんてものじゃない。それは目いっぱい立ちただかる青い壁でした。潮騒という言葉もなまやかし過ぎる。海は一日中轟いて、夜寝ていると、枕に直接波が砕けてくるとしか思えないのです。

毎朝起き上るなり、縁側から裸足で降り立ち、まだひんやりした砂の斜面を一気に波打際まで駆け降り、朝潮で身体を洗い、漁師のおかみさんから分けて貰った雑魚を両手にピンピン躍らせながら帰って来ます。あれほど朝食の美味しい生活は、あとにも先にもしりません。鱈もトマトも牛乳も、な

にもかもとりたてでした。生命そのものが剥き出しに並んでいるような食卓に向かっていると、深い井戸から汲み上げる清水のように、鮮やかな血が身体中に溢れてくる心持でした。

朝っぱらからこんなふうにうっとりしてしまった挙句、必ず切端詰ってから大あわてで背広に着替え、ネクタイはひつつかんだまま、七時十五分の東京行列車に向かって飛び出して行くダグを、私はその度に呆然と見送り、それから急にヨタヨタと妊婦らしくなって、長い一日をひたすら怠惰に読書三昧に過すのでした。

夕焼けをまともに浴びた彼が、腕いっぱいには野菜やパンや酒瓶を抱え、掠奪魔の赤鬼のような形相で小走りに帰って来る頃には、流木や落葉で気長に焚いた五右衛門風呂が、ようやく湯気を立て始めています。

湯上りの葡萄酒と夕食。それから二人は子供のように手をつないで、歌までうたいながら、夜の砂浜を歩きまわります。しばしば彼は、闇の海原にも乗り込んで行きました。黒い巨きいうねりの谷間に埋没した彼は、いくら目を凝らしても、もう視えない、声も聞えない。ふと、もうこのまま彼は再び還って来ないのではないかと思ってみたりして、身震いすることがありました。それは恐しい想像なのに、必ずいつか起こることのように思われ、その予感ほまるで願望のように私の血を騒がせました。

その時私はひどく幸福だったので、不幸にさえ寛大になれそうでした。それにともかく現実として定着させるにはあまりに神話的な生活なので、どんな実在も信じ過ぎてはいけないヨ、と覚悟していたのです。

ダグは結局私の視界から消えてしまいました。しかし、あの一夏の神話から誕生したゾエだけは、現実に育ち続けて、とびきり美しい少女になって、太平洋を越えた南カリフォルニアの烈しい夏の中で、一九六九年八月二十日の今日、五回目の誕生日を祝っているのです。

かつての私にとって、夏の終りが、いつも一年の終りでした。たいていの恋は夏と共に葬られ、それでもなくても必ずなにかしら、大きく脱け落ちていくのが夏の終りであり、そして私はとうとうまた一つ年をとったことを認めてしまうのです。

そのいまましい八月。くらげ、土用波、塵介の吹き溜り、くたびれてとげとげしい、それでいてまだ未練がましい避暑客達……夏の凋落がいよいよ顕らかになるその頃の、あわただしい日付の一つに過ぎなかった八月二十日が、五年前突然ゾエの誕生日に選ばれたのです。

以来、八月の葬送は忘れられました。あの物哀しい夏の終りが一度も訪れないままに、ゾエの蠟燭だけは着々と数を増して、とうとう五本にもなり、その上、四本目の蠟燭と二本目の蠟燭をそれぞれ用意したノエルとローリーが、次の誕生日を待ち構えているのです。あろうことかあるまいことか、私は今や三人の子供の母親なんですよ。

ゾエ一人の存在さえなにかの間違いではないかと思うくらいなのに、三人とは一体どうなっちゃっているのかしら。

どんな基準からいっても、五年に三人とはかなり忙しい仕事でしょう。しかもその間の私は、自分の家とか国とかに、ロクロク落着いていたことがない。ゾエを生んだのは、雑誌記者として働いていた会社を、腎臓病と称して三カ月ズル休みした間の早業だったし、ノエルが生れたのは、ヨーロッパから帰って来る途中の船の上だったし、ローリーを妊ったのは従軍記者になりすましてドンパチを見物していたヴェトナムの戦場らしいし、ともかくもそれで三人出来上ったとたんに、今度はそれを三個所に分散させて、私はアメリカ大陸を放浪しはじめてしまった。

どう思い返しても、子供を作っていたというよりは、旅をしていたという方が、はるかに実感に合うこの五年間です。

ところで、この五年間はおろか、三十一年間の人生を通じて、私は一度も結婚ということはしていませんよ。真正正銘の独身と威張れるほどスカッと自立しているわけではなく、いつでも身辺に男気を絶やさないし、特に子供達の父親とは数年間ちゃんと世帯を持ってもみたけれど、少くとも法律的には一貫して自由の身です。もっとも、子供を持った女が未婚でいることは、自由よりもむしろ不自由の方を余計にもたらすようで、やはり結婚という生活形態は、世間で圧倒的に支持されているだけのことはある、立派な人類の知恵だなと時々思います。

時々ではなく毎日そう思っていれば、もう少し落着きがよくなるのでしょうか、なにぶん独身というのでもまた捨て難く具合のいいもので、最終的な選択はつきません。

子供達と一緒に作ったダグとは、一応正式にも結婚してみるところでしたが、これは先方の都合もあることで、モタモタしているうちに愛想が尽きてしまい、一年近く前から離れっぱなしになってい

ます。彼はまだなんとか籍を入れるつもりでいるようだけれど、私はなんだか今更面倒臭い。でも今となっては、これはただあなた達子供の損得の問題なので、私の趣味はさておき、現実的な観点からよく検討してみましょう。勿論もう、実質的な意味で再び彼の奥さんになる気は、毛頭ないけれど、便宜上の手続きを強いて忌避する理由もないような気がします。彼の苗字より私の苗字の方が、私の美意識からすると好ましいけれど、名前なんてまあ好きなように名乗ればいいのだから、大した問題じゃない。それよりも私が考えるのは国籍のことです。アメリカと日本とどっちがいいかしら。私自身は日本人であることが大変気に入っているけれど、子供達にはどうなのかわからない。私があなた達と一緒にしばらくアメリカで暮してみようという目的の一つは、その答えを探すことです。

ゾエ、あなたは去年の七月六日、私の三十一回目の誕生日の朝を覚えていますか？ 太平洋を西から飛んで来た私達にとって、夜はひどく早く明け、私は半眠りのゾエの手を引張って、とりつくまのないようなロスアンゼルス空港を、とぼとぼと歩いていました。

横浜の家の生活がどうにもやりきれなくなっていた私は、ともかくローリーを生み落すまで我慢してから、彼を愛育病院に預け、ノエルは母に託して、ゾエだけを連れてしゃにむにアメリカへやって来たのでした。一応仕事にかこつけてはあるものの、実はなに一つ確かな当てはない、そして殆どお金もない、帰りの切符さえ持たない、なりゆきまかせの神風渡米です。でも私はとても泰然としていたでしょう。子供までひっかついで来てしまったのだという責任感が、むしろ私をふてぶてしくさせてたらしい。

この散漫な巨大国の、また、よりによって一番とりとめのない都市ロスアンゼルスで、アメリカと初対面したことも、私の心構えをドライに絞り上げてくれたようです。

そして私は、地図をひろげて、なんでもいいから要するに左から右へグイグイ直線を書きなぐるような調子で、全く無造作に、無感動に、このアメリカ大陸に踏みこんで行きました。

あのおそるべきバス旅行。五日間ひるも夜も乗り続け坐り続けて、一度も泣言を言わなかったのだから、ゾエも三歳の子供にしては上出来でした。

どうせ儉約しなければならぬのなら、徹底的にケチって儉約それ自体を目的にしてしまった方が、みじめったらしいくないから、私は二十ドル札一枚だけをポケットに入れて、それで大陸横断を果そうと決心しました。飛行機なんかに乗ったら二人で二五〇ドル。バスなら、日本で買っておいだ一カ月九十九ドル特別周遊券でどこまでも乗れるし、幼児は無料です。本当に眠たければ、横にならなくても眠れるはずだから、一切ホテルには泊らず、バスで眠ること。食事もハンバーガーとかホットドックとか、日頃食わず嫌いのアメリカ式経済食に親しむ絶好のチャンス。

それにしても、一日平均二人で四ドルは無茶ではないかと思ったら、ちゃんとそれで済みましたよ。ゾエは結構アイスクリームやキャンデーだって堪能してたでしょう。

アメリカの途方もない広さを実感するには大陸横断バスに乗るのが一番だとは、よく聞かされたことだけど、私の印象はむしろ逆でした。何万分の一の地図で見てさえヌーッとかさばったこの陸地の原寸のあらゆる一インチをごまかしなく踏み敷きながらも、ともかくひた走れば、四日目には向こう側の海が見えてしまうのです。ストンと風穴があいたようで、ナアンダと思い、以来アメリカの中の

どんな距離にも脅威や神秘を感じなくなっていました。私にとっては、北海道と九州の間によこたわる距離の方が、よっぽど得体の知れない感じですよ。

それに、あの大ざっぱな景色の変貌、亡者のようなサボテンがのたくりまわる黄泉の国アリゾナ、灌木の平たい繁みが執拗に茂るニュー・メキシコの岩山、ただただ茶色い地平線のテキサス。オクラホマからミズーリーへかけて、やっと土色が去れば、あとは緑また緑の典型的な田園風景。ひとたび画面が移れば、そのままこれでもかこれでもかと一日中続映されるから、いくら居眠りしようと見落す気づかいはなく、西から東への三千マイル、各州の巨大な断面図は、単純な四五六程度に、はっきり頭にたたみこまれ、二度と再びたしかめに赴く気など起こさせません。

フィラデルフィアとくると、なぜか必ず名門という言葉が浮びます。フランスの客船で一カ月航海をともしながら、遂に一度も言葉を交さなかった、あのおそろしくお高い新婚夫婦が、フィラデルフィアのナントカカントカ三世だったことなどついでに思い出し、あまりいい感じはしないのに、それでもこの古い都会の優雅さは、アメリカで私をはじめとさせました。やっぱり私ってカルチュアが好きなのね。

その後に続くニュージャージーの各州は、俄然窓の景色もキメが細く、あらゆる点景に頑固な彩りがあり、人生がびっしりとちりばめられ、私は刻々と生き返りながら、アメリカを懐しくむさぼりはじめました。

一度も来たことのない所を懐しいものだけけど、正直懐しいのだから仕方がない。特にボストンを過ぎる頃、いやボストンにしたって、あの煤けた煉瓦の犂ぎの中に感じた幽霊達は断乎として

私の昔馴染みだったし、その先に待ち構えていてバスを吸い込んだ、みずみずしい森の小径の懐しさといったら、もうどうしたらいいかわからなくて、悲鳴を上げそうで、仕方がないからゾエをひざに乗せて羽交締めにしていました。

しんとした森の中庭のかすかな日溜りも、大きな居間のような樹陰も、確かに見覚えがあるし、それが秋、すべて黄金色に輝く瞬間のことだって、はっきり記憶にあるのです。森を出て、ニューハンプシャーの海辺の町にさしかかると、唸るような眩しさの中から、たちまち旧知の夏が駆け寄って来ました。潮さびた出窓の紅い陽除けも、白ベンキがささくれだった露台の手摺りも、私が生れる前から知っているものばかりです。

私は随分妙なことを言っていますね。でも明らかに生れてはじめて足を踏み入れた土地で、ああやうとここに戻って来たという感動にとらわれたことは、前にもありました。イタリアのフロレンスがそうだったし、香港の山手の曲り角、レンニングラードの河岸、モナコの海洋博物館に続く海際の遊歩道も戦慄的でした。

未来のイメージしか期待して来なかったアメリカで、期待通りSF的な灰色のベルトにえんえんと乗せられて、送りこまれたその先が、やはり懐しい私の故郷だったのだから、嬉しくなってしまう。

それにしても、アメリカのはずれもはずれのメイン州ケニバンクなんて、そんな名前は知らなくても全く当り前のちっぽけな町をめぐって、しゃにむに大急ぎで大陸を突切って来た目的はなにかといえ、あのおっかないバーバラ小母さんに会うためだったのです。